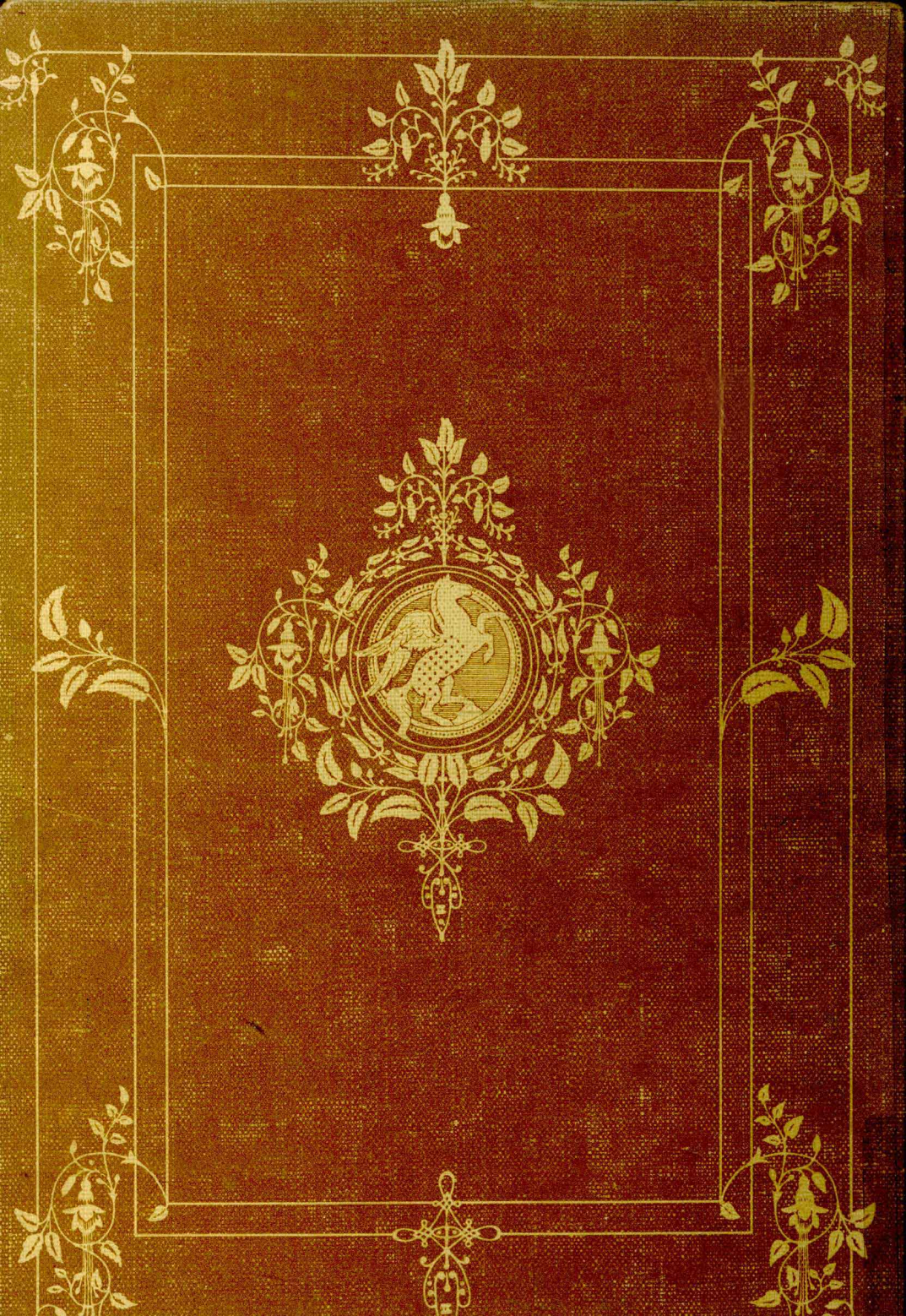

キリスト教文学の世界

20

HERMAN MELVILLE

主婦の友社

〈筆・訳者紹介〉

高見澤潤子　1907年生まれ。作家。評論家。
刈田元司　1912年生まれ。上智大学教授。
森　禮子　1928年生まれ。作家。劇作家。
尾上政次　1912年生まれ。中央大学教授。
上総英郎　1931年生まれ。文芸評論家。
原田敬一　1929年生まれ。千葉大学教授。

キリスト教文学の世界　20
ホーソン　アン・ポーター
メルヴィル

昭和五十三年三月二十五日　第一刷発行

定価一八〇〇円

発行者／石川晴彦
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一―六
郵便番号　一〇一
振替　東京二―一八〇番
電話　東京（〇三）二九四―一一一一（大代表）
印刷所／大日本印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

© SHUFUNOTOMO CO., LTD. 1978 Printed in Japan　0398—968486—3062

目次

ホーソン

〈解説〉勝利の緋文字　高見澤潤子　5

緋文字　刈田元司訳　17

人と作品……刈田元司　322

アン・ポーター

〈解説〉律法を越えるもの　森　禮子　193

昼　酒　尾上政次訳　202

人と作品……尾上政次　325

メルヴィル

〈解説〉

青春の殉教者　上総英郎　249

船乗りビリー・バッド　原田敬一訳　261

人と作品……原田敬一　329

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ホーソン

〈解説〉

勝利の緋文字

高見澤潤子

私は、ホーソンにはずい分苦しめられた。東京女子大学の入学試験に、どうしても、ホーソンの『トワイス・トールド・テールス』を、よみこなすだけの力が、なければならなかったからである。その頃の東京女子大の英文科は、予科一年、本科三年の四年のコースになっていて、予科から入学するのが順序なのだが、英語その他に自信のある人は、予科をとばして、いきなり本科一年に入学することも出来たのである。予科の入学試験には、ホーソンの『ワンダー・ブック』、本科一年の入学試験には、『トワイス・トールド・テールス』を、よみこなすだけの英語の力を必要とした。入学試験問題も、一、二題はこの中から出ることになっていたのである。

私は決して英語に自信はもっていなかった。ただ傲慢な少女だったので、いちかばちかためしてやれ、という気もちで、身の程も考えずに、本科一年の試験をうけることに定め、『トワ

イス・トールド・テールス』を、夢中になって勉強しだした。もちろん英語の力は弱かったから、ホーソンの難解な英文には、苦心惨たんした。こんな意地のわるいいいまわしをしなくたっていいのにと、何度も腹を立てながら、真剣に彼の英語と戦った。そんなわけで『トワイス・トールド・テールス』だけは、何度くり返してよんだかわからない。いやでもその中の十八編の短篇の物語は、全部頭に入ってしまった。もちろんその時は、夢中だったから、何故『トワイス・トールド・テールス』という題をつけたのか、その意味の深いところは知るべくもなかったが、一つ一つの短篇は、みな考えさせるものがあり、暗い、ぶきみなものもあったが、真実味があって感動したものだった。ことに「グレート・ストーン・フェース」には非常に感動して、入学してから、あらためて丁ねいに全部を翻訳して原稿にしてみたことがあった。こんないい話は、一般に多くの少女たちがよむべきものだ、どこかの少女雑誌にのせてもらいたいものだ、と考えたからである。

とに角、これほど一生けんめいになって、苦しんで勉強したものは、あとにも先にもなく、おかげで曲りなりにも本科一年に合格はしたし、ずい分苦しめられたものの、このためにかなりの訳の力がついたのはたしかで、ホーソンは私にとって、なつかしい作者であり、またそのおかげも、大分こうむっているのである。

入学してからも、ホーソンのものは、原文でよませられた。『緋文字』『七破風の屋敷』など、イングリッシュ・リーディングの時間で、外人の先生で、少しも日本語を使わないで教えられた。おまけに短い時間に、沢山の分量をよんでいかなければならず、文章はむずかしいし、説明も英語でぺらぺらいわれては半分もわからず、ただストーリーだけを頭に入れた程度であったが、それでも感動した。『七破風の屋敷』は暗い、推理小説的なもので、それなりの

面白さはあったし、『緋文字』の方は特に感動した。まだ純真な少女だったし、経験も浅く、何でも感じやすい年頃だったからだろう、と思ったが、今度、何十年ぶりかで、日本語でよんでみて、非常に感動した。前には理解出来なかったものを理解し、小説のテーマの深さもわかり、更にホーソンの偉大さを発見したからである。

『緋文字』は、十七世紀、清教徒が支配的な勢力をもっていた時代、ボストンにおこった悲しい恋愛と、その罪と罰の物語で、キリスト教文学であり、すぐれた傑作の古典である。

形而上的なテーマをあつかった小説は、テーマ自体さえよく解らないような、内容は更に難解な小説が多く、それが本格的な小説とされている現在、この小説のテーマは、解りやすく、やさしい。そのためか、安っぽい通俗文学のように批判する人も多い。『緋文字』にかぎらず、ホーソンという作者の芸術的価値をあまり買わない批評家もいる。ホーソン自身も自分の長篇を、ノーヴェルといわずにロマンスといっている。たしかにホーソンの長篇はストーリーが面白く、たくみにくみたてられていて、サスペンスもあり、それにひきずられて、難解の、時代がかった、くどくどした説明や描写など、とばしてよんでしまっても、わかるようなたのしさをもっている。その点、興味本位の小説のように考えられてもむりはない。しかしそれではホーソンのいいたいところも気がつかないだろうし、深い訴えもさとることはできないだろう。

彼は、決して単なる物語作家ではない。誠実な読者は、彼のゆたかな芸術的要素をみとめ、現在でも新鮮な感じを与える象徴的な意味を、作品のなかに発見する。ホーソンが長篇をロマンスといっているのは、彼独特の意味があって、普通私たちのいうロマンスとはちがうのである。彼は、外部の現実的な事実ではなく、内部の「人間の心の真実」を描こうとした。それに

は、幻想的な出来事にも、真実を語ることが出来るから、という意味でロマンスといったのである。『トワイス・トールド・テールス』という題の意味は、「二重に語られる話」ということだが、外側にあらわれた実際の事実から語られるだけでは、真実なものは得られない。同時に内側にかくされた精神的、心理的、または超自然的な面から語られなければ、真実はわからない、ということをいいたかったのである。『緋文字』だけではなく、ホーソンの作品は、大体こういった形而上的なテーマをあつかっている。

前にいったように『緋文字』の筋のはこび方、構想は実にうまいものである。最初から読者の気もちをぐっととらえてしまう。物語も独創的だが、悲劇の主人公、牧師ディムズデイルの苦悩の秘密が、徐々にあばかれてゆく過程の巧みさ、その方法の正確さはすばらしい。この小説の一番のクライマックスは、最後の処刑台の場、牧師の告白の場であるが、小さなクライマックスとしては、チリングワースがディムズデイルの胸の烙印を発見した時である。これは牧師にとっては致命的な場面であるし、読者にとっても、初めて大きな衝動をうける所である。しかしチリングワースが発見したものについては、全く説明されていない。ただ老医師の悪魔のような狂喜を爆発的に、巧みに表現しているだけである。読者は想像で、衝動をうけるのである。

この牧師の胸の烙印は、最後に、牧師自身の手によって、大衆の目前に現わされるのであるが、作者はその烙印がどんな風に、どんな形で、何によって印されているのか、具体的には全然書いていない。ただ人々の驚き、激動、牧師自身の告白等で、読者に知らせ、そのもの自体は、後で人々の印象、説明、証言にまかせてある。それがホーソンのテーマなのである。人々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の証言はさまざまである。どれが本当かわからない。明々白々の証拠をまざまざとみせられても、一人一人の目にうつったものはちがうのである。

物語のはこび方も巧みであるが、人物描写も巧みである。古い時代の、宗教と法律がほとんど一体になっている清教徒的な社会の事件であり、日本人である私たちには全くなじみのない世界の人物であるにもかかわらず、何とこの作品の中の人物は潑剌と生きていることだろう。特に三人の主人公、ディムズデイル牧師、スター・プリン、チリングワースは、歩けばその足音がきこえるように、姿をみせれば、その影が目の前にみえるように、親しく私たちにせまってくる。そのあざやかさが、この作品を、どんなに高く、すぐれたものにしているかわからない。

ホーソンは、このように巧みな手法で、「人間の心の真実」を書きつづけた。現代の人たちには、馬鹿馬鹿しいと思われるような、牧師ディムズデイルの悲惨な責苦は、彼の時代にあっては、特に彼のような教職にあっては、当然のことではあるが、やはり真実ある者の悩みであろう。現代においても真実に生きようとする者は、苦しまなければならない。しかしあえてホーソンは真実を求め、要求するのである。

この『緋文字』のクライマックス、「緋文字の発覚」の章のショッキングな場面のあと、最後の章、「結末」で、ディムズデイルの教訓として記されている言葉こそ、この小説のテーマの中心である。

「真実であれ！　真実であれ！　真実であれ！　世間に対し、きみの最悪の特性でなくとも、その最悪のものが推測されるような特性を、遠慮なく世間に示せよ！」（P 183）

人間の心の真実さは、事実、行為、証拠などを越えて、厳然と神とともにあるものだ。神との関係があってこそ、本当の真実がある。

このむずかしい教訓、人間には到底出来そうもないこと、形而上の事柄に及ぶことを、ホーソンは訴えつづけたのである。

私たちのささやかな日常生活だけを考えても、真実ほど尊いものはないが、こんなにむずかしいものもない。人間は、真実がどんなに尊いものか、大切なものか、どんなに求めるべきものかをよく知っている。それなのに真実な行為も、真実な生活も、真実な人間関係も出来ない、まして人にみえない心の中の不真実、みにくさはお話にならない。そのくせ、世間に対して、社会に対して、政治に対して、他人に対しては、あくまでも真実を要求し、少しでも不真実なところを、みとめると、激しく責め、批判する。これが人間である。どうしようもない、おろかな弱い人間、キリスト教でいう原罪ともいうべきものであろう。真実でないところでは、神を失っているからである。原罪というものは、目にみえた悪の行為や、罪の犯行をいうのではない。人間の心の奥に巣くう、深い人間の反神の心、神のない心をいう。

前にもいったが、この小説は、単にその時代の社会の批判、その時代の犠牲ともいうべき悲しい恋愛問題だけをとりあげているのではないのである。このどうしようもない、人間の心に根強くはびこっている、深刻な罪まで掘り下げて考えている。大抵の人は考えてもみない、また気がついてもいない、深い人間の罪の問題を小説にしている。しかも、ホーソンは、巧みな心理描写、性格や心の細やかな表現を通して、示しているのである。

ホーソンは、鋭い目で、三人の主人公を通して、人間の複雑性、二重人格、三重人格を書いている。これは人間の欠点とか短所とかいうにはあまりに深すぎるし、悪として片づけてしま

うほど簡単なものではない、罪というより他はないだろう。この三人の主人公は、三人とも、表面に現われた、他人からみられているものと、心の中にかくされて、自分だけが思っているものとは、全くちがうのである。外側にあらわれているものだけで、人間を批判することは出来ないし、それだけで真実をつかむことは、とても出来ないのである。

公衆の尊敬をうけながら、犯した罪で苦悩する牧師、社会の制裁を甘んじてうけながら、心はそれに反抗しているヘスター、すぐれた医師とみられながら、悪魔のような復讐心を抱いているチリングワース、そしてこの三人の、それぞれの社会の関係でちがう悲劇の人間模様が、すばらしく描かれている。

今の人たちは、実証主義というのであろうか、証拠をみなければ、信じようとしない。事実をたしかめなければ、本当と思わない。私の目でみたからたしかだ、などといいはる。しかし、人間の目がどの位正確に本当の事実をみているだろうか、目に入った事件がどのくらい完全なのであろうか。

この小説にあらわれているように、同じ牧師の胸の絡印を、同じ時にみた多くの人たちは、さまざまにちがう事実を証言し、説明しているではないか。古いといわれるホーソンの方が、ずっと実証主義より新鮮である。結局ホーソンは、人生の深い真実をみるのには、外部に現われているものを、目でみるだけでは駄目で、みえないものをみようとしなければつかめないことを、私たちに教えている。

この小説を生かし、立派な古典としている点もその点である。実証を要求する現代の人たちには物足らなく思われるだろうが、目にみえないところを想像し、感じとるゆたかな魂をもつ

読者には、却って強く胸をうつ点である。

すぐ気がつくところは、ディムズデイルとヘスター・プリンの恋愛が、どのようにしてもえ上り、どのように発展したか、初めから意気投合したのか、ほんの一時的な情熱だけで、あとは後悔だけ残ったのか、何回か逢瀬はつづいたのか、どっちが悪かったのか、一言も書いていない。ただディムズデイルの苦悩、ヘスター・プリンの心の動きや、思いめぐらす細やかな描写を通して、読者は想像しなければならないのである。

大抵の人は、この恋人たちの胸に、真実な愛情がわき、二人とも堪えられぬ苦しみになやみながら、遂に犯した罪の場面を、巧みに描写されたならば、ディムズデイルの苦悩も、ヘスター・プリンの悲惨な境遇も、もっと鮮明にうきぼりにされるし、最後の処刑台の悲劇ももっと痛切に、読者の胸をうつ、と思うだろう。もしかしたら、ホーソン自身も、そうした誘惑にひっかかったかもしれない。それをあえて出さなかったところに、ホーソンの深い洞察があったのである。みえないものをみることの大切さを、よく知っていたからである。読者は、二人の罪の行為、事件を想像しながら、二人の心理状態、苦悩の状態などを通して、二人の真実な愛情を感じるだけで満足しなければならない。しかし、その表現や描写のすばらしさによって、恋愛の説明などない方が、ずっと生き生きとした印象を覚えるのである。それに、これは恋愛小説ではあるが、恋愛そのものより、罪というものに焦点をあてた小説だから、なお更のことである。

『緋文字』の序として、冒頭に書かれた「税関」は、これから始まる物語の「まえがき」のようなもので、作者が読者に話しかけているような形になっている。物語とは全然関係はないの

であるが、ただ「緋文字」をホーソンらしく巧みに紹介し、説明しているので、物語とたち切ってしまうことは出来ない。このあとに二十四章もつづく物語とは、書き方も舞台もまるでちがうが、やはり『緋文字』の序として動かされない重要な章である。あとの各章とくらべて、四倍も五倍も長く、退屈するような、冗漫な書き方で、たいして面白くもない港町セイレムの状況や、税関の様子、税関の役人たちの紹介で、うんざりする人も多いだろうが、よみおとしてはいけない。ゆっくりと、気をおちつけてよめば、その時代ののんびりした港町風俗、人間像などが巧みに描かれていることに気がつく筈である。そして、古い、すり切れた、ぼろ布のような緋文字の布を発見するところに来て、俄然、ぞっとするような、ぶきみな気もちにおそわれる。

「――わたしは偶然それを胸に当ててみた。そのときわたしは――読者は笑われるかもしれないが、わたしのことばを信じていただきたい――わたしは必ずしも肉体的な感覚ではないが、まるで燃えるような熱の、ほとんど肉体的な感覚を経験したように思われた。その文字が赤い布ではなくて赤熱した鉄の文字であるかのような感覚であった。わたしはぞっとして、思わずそれを床に落とした」（P 36）

このあざやかな象徴的な表現は、つづく物語全体の上に、どっしりと、そのぼろ布のような緋文字をのせて、動こうとしない力をもっている。物語の最後のしめくくりまで動かない。最後は、罪の二人の墓の説明で終っているが、墓石にまでこの緋文字は、きざまれているのである。そして、次の言葉で終っている。

「この物語は、あまりに暗く、ただ、その影よりもなお陰うつな光の一点がたえず燃えていることによってのみ救われているのである。――

『暗黒の野に、真紅の文字A』（P186）

この悲しくもおごそかに描写された「緋文字」は、この世ではいつまでも、いつまでも死んだあとまで墓石にしるされて、罪人とさげすまれ、嫌われ、差別されているものの、みえない真実な二人の心の世界では、清らかな、優雅な愛情にもえている。ディムズデイルが処刑台の上で、その死の直前にヘスターにいった、絶叫のような言葉――

「人びとの前で、恥辱にさらされながらもこのように勝利の死にかたをさせてくださることによって！」（P181）

という言葉通り、みえない神の世界では、勝利の光にかがやいているのである。このショッキングな、クライマックスの場面、処刑台にたつ罪に汚れた二人と、二人の子供パールの、みじめな、恥さらしの、世間からみたらけがらわしい場面は、公に罪を告白した崇高な勝利で、まぶしいほどかがやいている。そこまで大胆に、深くもっていったホーソンに、敬服するより他はない。これこそ偉大なキリスト教文学であり、ホーソンは神を崇め、罪をみとめ、救いを信じた作者である。きびしすぎるが、真実さのないピューリタンのゆがんだ倫理や、安っぽい因果応報的な道徳の小説ではなく、人間存在の究極の問題である罪と救いの小説である。

ディムズデイルは、処刑台の上で、ヘスターには思いがけない言葉をいう。

「このほうがよいだろう。森の中でわたしたちが考えたことよりもね？」（P179）

疑惑と不安にふるえながら、弱々しくいわれたこの言葉こそ、罪のあがないと救いに輝く勝利の言葉であったのである。そしてディムズデイルは、自分たちの犯した罪のことを、

「わたしたちが神さまを忘れたとき――おたがいの魂に対する尊敬を破ったとき――」（P181）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com